

以產地爲名

人どもの言分に、確に證據も無し、盜人は二人の中にありと、遁さず取廻し御前へ罷出でし、兩人おなじ申分なれば、あましまし御聞届け遊ばされ、一荷の椀を御白洲に撒散らさせ、兩人一度に立懸つて手ばしかく、これを重ねよとの御意、聲を懸けて立合ひ、一人はやうく四五膳重ねける間に、一人は手に入かさねしまへば、これより盜人露顯れ、其身丸裸に遊ばし、洛外に追拂はせ給ひ、此著類は椀賣に下されけるとなり、

〔茶道筌蹄^五〕食器之部

吉野椀^{坪付} 利休形、芍薬椀と云はよろしからず、葛の花なり、親椀ばかり碁笥底、坪は了々齋好也、尤以前は上り子の坪平を用ゆ、

○按ズルニ、吉野椀ハ大和國吉野郡ニ於テ製スル椀ニシテ、黒漆ヲ以テ髹シ、外面ニ木芙蓉ヲ朱漆ヲ以テ畫ケリ、又根來塗ヲ摸倣シテ、髹法ヲ創メタリ、世ニ吉野根來ト云フ、其髹法ヲ以テ椀ヲ塗リタルモアリ、共ニ其原始ノ時詳ナラズ、

〔茶式湖月抄^{三篇下}〕吉野椀寸法

食椀 總高二寸二分、廣四寸四分、底板二寸分半、内の深さ壹分半、

同蓋 總高壹寸六分半、廣三寸九分半、かう臺高貳分、厚壹分、廣壹寸八分、

汁椀 總高壹寸九分、廣四寸一分八厘、底板壹寸九分、深壹分二厘、

同蓋 總高壹寸三分半、廣三寸七分、かう臺高貳分、廣壹寸七分二厘、厚八厘、

右の椀眞の黒花塗、内外朱にして芙蓉の繪あり、身ふた共同斷、但蓋の糸底地すり朱、椀四ツとも口も朱のいつかけ有之、

食椀汁わんとも口のつばめ朱、ふた口いとぞこつばめ朱、^{○下略}

〔萬代狂歌集^一〕山花を

惟柄見鷹